ISSN 1883-3179

南山アーカイブズニュース

NANZAN Archives News

第17号　2024年11月1日

目　次

巻頭言

南山大学の国際教育の過去、現在、未来 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 山岸　敬和 ・・・・ 2

回想の中の南山

入試出題担当教員はつらいよ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 青山　幹哉 ・・・・ 4

奇術部50周年 !!

　　～幸せのための魔法～ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 中谷　豊実 ・・・・ 7

聖霊の体育行事・・ 藤井　裕美 ・・・・ 9

南山発見

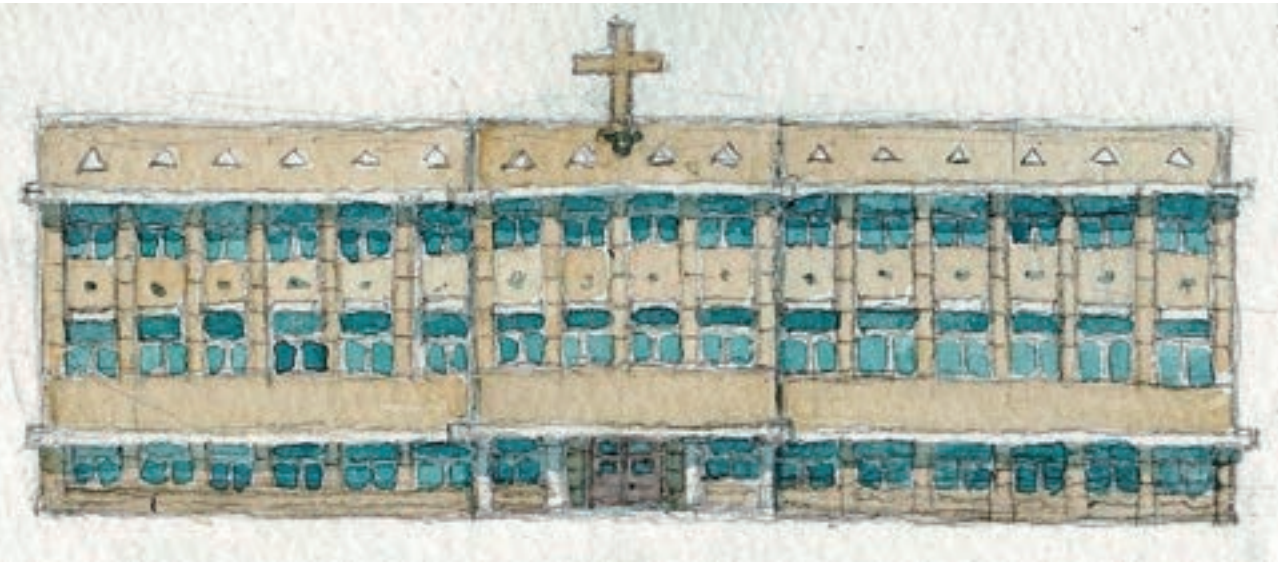
聖園女学院　制服第一装モデルチェンジ

　　～新しい自分に出会うチャレンジを目指して～ ・・・・・・・・・・・・・・ 鹿野　直美 ・・・・11

『かけがえのないあなたと私』を感じる南山小の宿泊学習 ・・・・・・・・・・・ 水越　建太 ・・・・13

南山学園小島鐐次郎記念室紹介

南山学園小島鐐次郎記念室を開設しました ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 寺本　将史 ・・・・15



南山学園ライネルス館（現南山アーカイブズ）　イラスト：村瀬良太

巻頭言

南山大学の国際教育の過去、現在、未来

山岸　敬和

2007年、外国語学部英米学科に専任講師として着任して間もなくの頃、私はまだ第２研究室棟にあった国際教育センターを訪れた。不満を伝えるためである。「南山大学は国際性を謳っているのに、なぜ学部生と外国人留学生別科（CJS）の学生の間の交流の機会はほとんどないのですか？」窓口で対応をしてくれた、残念ながら今は亡き八木瑞穂さんが嬉しそうに私にこう言ったのを覚えている。「そのようなことを真剣に考えていただける先生が南山大学に来てくれて嬉しいです！」

それからしばらく経ち、2013年から国際センターで副センター長を務めることになった。それ以降、研究休暇を取った一年を除いて、継続して国際センターでの役職を務めさせていただいている。その間にさまざまな新たな取り組みがなされた。

2017年に行われた国際教育センターから国際センターへの改組は特に大きな意味を持った。前出の八木さんはこのために最後の力を注いでくれた。国際戦略係が作られ、それが文部科学省の「大学の世界展開力強化事業」の採択につながった。また、国際センターや学部・学科が主催する短期留学プログラムの数が大幅に増えた。言語を問わない国際交流の場として多文化交流スペースStellaもオープンした。そして、2022年４月には、神言会の創立者のアーノルド・ヤンセン神父の名前を冠した南山大学ヤンセン国際寮が開設された。本学における国際交流の機会は大きく拡大した。

しかし、これらの取り組みは、南山大学で国際教育に取り組んでこられた先人の努力が積み重ねられた結果であると言える。南山アーカイブズでは、これまでの国際教育の取り組みについての展示や資料を見ることができる。所蔵されている古い『南山ブレティン』を見ると、1974年にCJSを設立し、同時に海外協定校を増やしていく頃の関係者の熱い思いが見て取れる。

(1)　1975. 6. 5　NANZAN UNIVERSITY BULLETIN　No. 30

南　山　30号

主要記事

大学と国際交流

南山ブレティン30号（1975.6.5）

「CJS開設49年秋―南山キャンパスを海外との文化交流の場に―」という1973年（No. 24. 1973.8.25）の記事にはCJSが設立された動機が書かれている。「南山大学での学生レベルでの海外留学は年々増加してはいるが、一方交通的でその道は狭いものであった。このＣ・Ｊ・Ｓ開設を機に、本学学生が留学するだけでなく、外国人留学生をキャンパスに迎えるという『往復交通』に踏み切ることにしたわけである」。ネブラスカ大学リンカーン校とイリノイ州立大学の二大学との交換協定を結び、夏季にはイギリスにおける日本研究者の総合組織BAJSから学生を受け入れるところからCJSの活動が始まった。

設立翌年の号の「大学と国際交流」という題が付けられたブレティン巻頭言では異文化理解について以下のように書かれている。「文化を知る仕事には、多くの人の協力と薄紙を一枚々々はがして行く慎重さが要る。そしてその努力が学問というものなのである」。キャンパスにおける国際交流の量のみならず質も向上させたいとする関係者の強い思いが伝わってくる。

交換協定校の数は着実に増えていった。1972年には２大学だったものが、2024年８月の時点では126大学にもなった。当初はアメリカや西欧が中心であった交換留学先も、ラテンアメリカ、中東、東欧、アフリカ等にも協定校が拡大した。同時に、キャンパス内における国際交流を活性化させるための取り組みもなされた。2007年には英語やその他の外国語のみで交流するワールドプラザ、2011年には使用言語を日本語に限定したジャパンプラザを開設した。南山大学の国際教育の発展は多くの教職員の努力によって支えられてきた。

コロナ禍は大きな試練となった。留学が停止され、海外での学びを夢見ていた学生にとっては辛い経験となった。しかし、このピンチをチャンスにすべく努力が継続された。前述の2018年から５年度にわたって行われた大学の世界展開力強化事業によって、南山大学にはCOIL型授業が定着した。これはオンラインツールを利用して国際共修の機会を創出するものである。またコロナ後には、CJS生と学部生が一緒に授業を受けることができるオープンコースを拡大する取り組みも行っている。

野心的な教育プログラムを実施しているヤンセン国際寮のエントランススペースにヤンセン神父の言葉が飾ってある。「我々が生きる時代は、多くのものが崩れ去るような時代である。我々にはその代わりとなるものをつくりだす使命がある」。ヤンセン神父のこの思いを、南山大学における国際教育の発展を支えた先人たちがしっかりと受け継いだ。そして今バトンを持つ私たちはさらにそれを発展させて次の世代に渡していく責務がある。

（南山大学国際教養学部・教授）

南山アーカイブズからのご案内

南山アーカイブズでは、学園に関する史資料の移管、収集、調査、整理、保管、公開および活用等を行っており、南山学園の歩みを概観する常設展示室と南山学園の歴史について様々な視点からの展示を行う企画展示室を設置しています。

＊開館時間：月～金（土・日・祝・南山学園の事務休業日を除く）午前10時～午後４時
＊入館料：無　料
＊予　約：不　要
※史資料の閲覧、および複写については数日を要する場合がございます。
詳しくはお問い合わせください。

＊展示クイズ・スタンプラリーコーナーもあります。
参加者には記念品の配付も行っておりますので、ぜひご参加ください。ご来館をお待ちしております。

第７回　南山アーカイブズ企画展「南山アーカイブズ 10年の歩み」

開催期間：2024年10月１日（火）～ 2025年７月31日（木）
開館時間：月～金（土・日・祝・南山学園の事務休業日を除く）午前10時～午後４時
会　　場：学校法人南山学園 南山アーカイブズ企画展示室（ライネルス館３階）
備　　考：予約不要・入場無料（一般の方もご観覧いただけます）

回想の中の南山

入試出題担当教員はつらいよ

青山　幹哉

入試問題作成業務については、秘密事項が多く、大学史の記録としては残りにくい。私は2024年３月をもって大学を退職したので、もう、入試（「日本史」）担当教員であったことを暴露してもよろしいかと思い、ここに2000年～10年代前半の入試業務についての思い出を記すことにしよう。

1999年４月１日、本部棟第３会議室で採用辞令をマルクス学長から交付され、一息ついた時のことである。副学長の先生がつかつかと私に近づき、「入試、よろしく」と一言。これが私の入試業務の始まりであった。

４月中に入試「日本史」の主任Ｋ教授に呼ばれ、最初の打ち合わせがあった。そこで、誰が入試出題者かということは極秘事項なので、出題者であるとも出題者でないとも、学外はもちろん学内でも言ってはいけないと釘を刺された。当然のことである。ただ、出題担当者も各教員に割り当てられる全学・学部・学科の各種委員が回ってくる。実際の人選をする学科長には教員個々人の負担を勘案していただきたいところだが、出題担当は秘密なので公然と主張することができず、結局、任命される委員の種類によっては過重な作業量を課せられることも起こる。実際、後年、私も入試広報のための高校巡りと次年度時間割編成などの業務が入試問題校正と重なり、どうにも時間の遣り繰りがつかなくなったことがある。

さて、１年目こそ「新人」扱いで作問数は少なかったが、日本史を専門とする教員ということで、私はすぐにＫ主任の補佐役として酷使されるようになった。

春学期の間に、出題担当者は主任から与えられた条件の下で、入試問題を作成することになっていた。担当者は、自分の専門に近く関心の深い事象を取り上げて作問することが多かった。たとえば、フランスの思想史家ミシェル・フーコーを研究対象にしていたＳ教授は、フーコーの『監獄の誕生』に触発されて、江戸時代の監獄を問題にしようとした。ただ、高校教科書に江戸時代の監獄―牢屋敷―は記載されていない。相談を受けた私としては、なんとか教科書で解答可能な問題にするため、無い知恵を絞って悪戦苦闘するしかなかった。

余談ながら、予備校は各大学のWebページでその大学の日本史教員をチェックする。そして、たとえば、Ｒ大には豊臣政権を専門とするＦ先生がいるとわかれば、豊臣政権の前後にヤマを張った模擬問題を作り、Ｒ大受験の対策とする。南山大学の場合、予備校に把握されていたのはＫ主任と私ぐらいなので、専門外の教員が何を出題するか、予想することは不可能であったであろう。

各担当者が問題原案を作成すると、春学期（当時は２学期制）の定期試験期間（７月下旬）に皆が会議室に集まり、一問ずつ検討を加えていった。この検討会は、朝９時半から18時頃まで毎日行われた。Ｋ主任には、「検討会」としてだけでなく「勉強会」とする意識があったのであろうか、話がずれていってもあまり抑えることはなかった。出題担当者のほとんどは日本史学を専門としない教員なのだが、日本史には関心の深い人たちばかりなので、私としては、日本史のさまざまな事象について、法学・経済学・社会学など、異なる分野からの視角を学べたことは幸いであった。

ただ、体力を要するハードな会議であったため、３日目ぐらいには、こっくりこっくり舟を漕ぐ年配の教員の姿も見られた。そんな中での楽しみは、昼のお弁当であった。もちろん、豪華な重箱の弁当が届くわけもないのだが、それでも「並」ではなく、1000円を超える程度の弁当が届けられ、たまには「おっ、今日は『〇〇彦』の和風弁当じゃないか」とそれなりに盛り上がった。昼食時間には、異なる学部学科教員の間で、授業や学生対応の苦労話、大学関係の情報交換、噂話など、さまざまな雑談が交わされた。そして18時過ぎに検討会が終わると、私は後片付けをして帰る……のではなく、Ｋ主任に連れられて今池の居酒屋で終電近くまで飲むのが常で

あった（K主任は単身赴任であった）。

７月の検討会を終え、印刷所に問題原稿を入れても、作業は終わらない。初校の校正には、また皆が集まって再検討を加え、（授業期間中ながら）ほぼ１ヶ月をかけて修正した。難易度を調整し、別解の可能性を消し、あれやこれやで入試「日本史」の初校戻し稿は、いつも朱字の訂正で全ページが真っ赤になるのが常であった。

再校もまた同じように行われた。再校では文章の直しに力が注がれた。このような作業をすると、法学部の教員にある特徴が見られた。文意をきわめて明確になるよう修正するのである。なるほどと感心することも多かったが、私はあえて反対することもあった。それは明確にしようとすると、どうも物事を論理的な“因果関係”として記述してしまう傾向が見られたからである。歴史学の立場からは因果関係として立証できないこともあり、そうなると正誤の判断に迷いが生じることになる。したがって、単に“並列”として記述した方が無難であるということになる。

しかし、どれだけ検討を重ね、修正しても、入試問題にミスは生じる。

一般入試が始まると、「日本史」の試験時間には、主任と出題者数名が入試本部で待機する。受験生と同じ問題紙・解答紙を見て、正解の最終チェックをする傍ら、受験生からの質問に備えるためである。

私が初めて主任となった年度のことである。山を越え川を越え、ようやく一般入試最終日の本部待機にまで至った。試験時間も終了間近となり、いささか緊張も緩んだ時のことである。扉が開いて、係員が受験生からの質問票を持ってきた。「日本史」の質問であった。開くと「『日本書記』は『日本書紀』の誤りですか」と。慌てて問題紙を確認すると確かに「紀」であるべき漢字が「記」となっていた。誤字である。試験時間内に板書で訂正できれば、重大な“入試ミス”にならない。私は「板書訂正！」と叫んだが、そこで試験終了のブザーが鳴った。万事休す。学力検査委員長にミスを報告して、善後策を講ずることになった。「日本書記」の語を含む文は、文の正誤を問うものであり、実は誤りの文であった。正直、「もともと誤りの文だから、誤字があっても解答には関係なし」と頬被りしてしまえ、との誘惑にも駆られた。しかし、さすがに意図して「紀」を「記」に違えて正誤問題にした、というのでは、大学の悪評を呼ぶことになると思い直し、副学長以下には「入試ミス」として処理してもらうようお願いした。当時は、受験生全員に訂正とお詫びの文を封書で通知することになっていた。入試課職員は残業である。私は「申し訳ありません」と深々と頭を下げたのであった（今から思うと、私もまだ純真だった）。

2001年度『委嘱状』

2014年度入学試験問題

2000年代末以降になると、自分が科目主任となることが多くなった。新年度が始まると、まず主任がやるべきことは、新人のスカウトである。退職・留学・研究休暇・その他の理由で、出題担当者はほぼ毎年減るため、新たに補充しなければいけない。

「○○先生、お願いできませんか」と目星を付けた教員には、電話攻勢をかけ、研究室の外で待ち伏せする。ほとんどストーカーである。頼まれる方としては、専門領域外の、面倒なことなど、やりたくないだろう。そこをなんとか口説いてチームに入れるわけだが、幸い、私が主任であった時は、ほとんど皆さん、引き受けてくれ

た。主任と言っても何の強制力もないので、参加していただいた皆さんには改めて感謝する。

主任は、入試問題の印刷業務にも関わった。印刷所との原稿・校正稿の出し入れには、科目主任と入試課職員が二人一組で現物を抱えて、大学と東京の印刷所を行き来するのであった。その際、東海道新幹線以外は、できるだけ遺失・盗難を防ぐため、タクシーを利用した。VIP 待遇なのは「入試問題」なのだが、そんな贅沢をしたことのない私としては、妙にうれしかった。

その頃のこと。某氏に会った時、「先生、この間、東京駅でお見かけしましたよ」と言われた。彼はニヤリとして、

「ご旅行でしたか、女性とお二人でしたね。」

「いや、その……」（誤解だ！　同行者は入試課の女性職員！　キャリーケースには厳封された入試問題が入っていたの！）

と思わず弁解したいところだが、それは極秘事項、部外者に漏らすわけにはいかない。某さん、今だから言えるが、あれは大学の業務だったんですよ！

以上、10年以上前の入試「日本史」出題担当教員の思い出の一端を綴りました。入試問題はミスがなくてあたりまえ、会心の出来の良問を出題しても評価されない、まさに「つらいよ」とぼやきたくなる仕事でした。しかし、“同志”として苦楽を共にした出題者チームのことを思うと、今でも何やら微苦笑が浮かびます。

（元南山大学教授）

史資料提供のお願い

南山アーカイブズでは、以下の欠号になっている史資料を探しています。
ご寄贈いただける場合は、南山アーカイブズまでお持ちいただくか、郵送・学園便等でお送りください。

- 『南山大学卒業アルバム』（1980年、2008年）
- 『NANZAN HIGH SCHOOL BULLETIN』（No. 131、No. 132、No. 133、No. 134）
- 『南山短期大学ブレティン』（49号　2004.10.10）

また、南山学園に関する以下のもので、南山アーカイブズへご提供いただけるものがありましたら、ご連絡いただきたくお願い申し上げます。

- モノ史料：鞄・校章・バッジ・体操服・制服など
- 写真：授業風景・学生生活・サークル活動など（撮影年月日が分かるもの）

史資料の取り扱いについては、個人情報が含まれている史資料は非公開にするなど、十分注意しております。

寄贈者による公開制限希望にも対応いたしますので、お申し出ください。

〈連絡先〉
学校法人南山学園 南山アーカイブズ
TEL: 052-861-0613/FAX: 052-861-0614
E-mail: nanzan-archives@nanzan.ac.jp

奇術部50周年 !!

～幸せのための魔法～

中谷　豊実

1974年に産声を上げた奇術部は全国的にも極めて珍しい部活であり、2023年の春にはNHKのEテレ「沼にハマって聞いてみた」という全国放送番組からも取材を受けました！

「沼にハマって聞いてみた」撮影風景

テーブル上でおみせするカードマジックから人間を浮かせたり切断するという派手なイリュージョン、そして様々なジャグリングまで披露できる実力を誇ります。現在の部員数は中１～高３までで53名の大所帯。夏休みに学園伊勢海浜センターで毎年行っている合宿は一度に宿泊できる人数を超えているので前後半に分かれて実施するという嬉しい悲鳴状態です。最近は奇術部があるから男子部に入学しましたという部員も毎年複数名いるほどになりました。

還暦を超えた初代部員から大学生まで50年の歴史を感じさせる様々な世代が集まり、50周年実行委員会が立ち上がりました。今年度３学期の２月23日に学園講堂で13時開演！　披露するショウや、その後に地下のホールで行われるパーティーのことなどを定期的に集まりワイワイと話をしています。時折カードマジックが披露されてしまうことも奇術部OBの集まりならではでしょう。OBの中にはプロマジシャンもいますし、腕がなまったアラウンド還暦のOB達も猛練習をするとのこと、当日のステージは盛り上がること間違いなしです！

50周年実行委員会の場で初代キャプテンの喜多さんに、創部当時について色々とお話を聞くことができました。1974年の文化祭で高校一年生だった喜多さんを中心とする有志がマジックを披露したのが始まりだそうです。文化祭ではとても好評でしたのでその後、部活として申請したところすぐに認可されたということでした。その理由として、マジック自体の文化的価値もありますが、1974年少し前に全国大会にも出場経験のある演劇部が廃部になっており、ステージ系の部活が無かったためによりスムーズに認可されたということも理由なようです。顧問になってくださったのは英語科の青年教師だった森和夫先生と、社会科の飯島先生だったとお伺いしました。

当初はテーブルの上でおこなうトランプのマジックから始まりましたが、教室ほどの会場で披露するサロンマジックや講堂レベルの広い会場で行うイリュージョンマジックまで次第に演目は広がっていったそうです。1970年代はマジックを買うにも習うにもなかなか困難もあったようですが、デパートのマジック売り場の店員さん達も協力してくださり、本格的なマジック演目を増やし、テクニックも身に付けていかれたそうです。数年後にはなんとマジック売り場のディーラー（実演販売員）をされている方のご子息が入部されたことも驚きのエピソードでした。皆さんご存じのMr.マリックさんもこの当時は名古屋のデパートで若きディーラー（実演販売員）として活躍をされていたそうです。

ちなみにディーラーがいるマジック売り場は、現在ではハンズの８階パーティーグッズコーナーだけになってしまいました。こちらでは週末だけになりますが今でも素晴らしい実演販売がおこなわれており、私も時々行っ

てプロの魅せ方を学んでいます。

テーブル上でのマジック披露

大先輩たちはこのようなプロの方々にマジックの手ほどきを受けて、解説書を読みながら腕を上げていったわけですが､現在では動画がその助けとなってきています。それから、名古屋にはカードマジックの世界トップレベルである桂川新平さんがいらっしゃるのですが、マジックのスクールをされており、奇術部の各学年にそこに通う部員が複数名いることも、奇術部のレベルを向上している大きな要素になっています。桂川さんの弟様は男子部の野球部で活躍されていたということをお聞きして、ご縁に驚きました。世界トップレベルのマジシャンが年に数回、なんとボランティアでマジックを教えに来てくださることにも感謝しかありません。

人体浮遊

病棟道化師「ケアリングクラウン」として赤十字病院や聖霊病院の入院されている方達のもとへボランティア訪問している中谷が森先生のご退職を受け顧問に就任した12年ほど前からは、そのネットワークを生かして福祉施設への訪問を活発にするようになりました。部員たちは実際にお客さんの前で演ずることによりコミュニケーションを学び、目の前で喜んでいただくことにより自己肯定感が上がり、そして何よりも南山学園が標榜する「人間の尊厳の為に」をマジックやジャグリングといったエンターテイメントで具現化していることに喜びを感じて活発に外部へでかけております。その回数は年間40回ほどを数えており、高校文化連盟のボランティア専門部にも所属しています。今年度の文化部総合県大会であるアートフェスタではステージ発表ができる上位３校に選ばれて８月25日に栄の県芸術劇場に出演して奇術部の活動を皆さんに紹介することが出来ました。

また男子部の大教室と中教室周辺を会場にして、近隣の養護施設の子ども達を招待してのカーニバルも年に２回開催しています。社会的に擁護の必要な子ども達とのかかわりによって、部員達もこの社会の様々な問題に対して自分に何ができるのかを学んでいることと確信しています。

この夏休みには地震被害に遭った能登の輪島と七尾にあるカトリック教会の幼稚園を、高校２年生の部員３名と顧問の私が訪問してマジックショウと、荒れてしまった園庭の整備のお手伝いをさせていただきました。

このように現在の南山奇術部は「幸せのための魔法」を合言葉にボランティア活動にも一層力を注ぎ、愛知県知事、赤十字、県警、ボランティアアワード様からも表彰を頂き、その賞状は事務室前の表彰状の陳列ケースに置かれています。

全国的に見てもマジックの部活動として50年続いているのは南山のみだと思います。先輩方から継承されたその伝統を誇りに感じながら､「人間の尊厳」のために「幸せのための魔法」を多くの方にかけていきたいと意気込んでいます。

修道院合宿

（南山高等学校・中学校男子部教諭）

聖霊の体育行事

藤井　裕美

私と聖霊との出会いは、「体育の非常勤講師で勤務して欲しい」というＫ学監の一本の電話でした。その場ですぐに「お願いします」とお返事し、指定された日に名鉄瀬戸線とタクシーを使って履歴書を持参しました。初めて足を踏み入れた聖霊（瀬戸の旧校舎）の校舎で、当時の校長であった大野神父様に面接していただき、「これがカトリック校なんだ」と感じるような優しく温かく包み込まれるような言葉をかけていただいたことを強く覚えています。

日常的には車通勤になるので下見をした際、当時の愛知環状鉄道は工事が中断状態で高架のみが建っており、田園風景を眺めながら緑映える山の中へ進んで坂を上りきるとひっそりと校舎（当時の校舎の外壁は雨水にさらされたグレー掛かった白色）が見えてきたのが印象的でした。１時間以上の通勤時間になるので「とても遠い」と感じましたが、体育科の教員を目指していた私にとって、「講師」として働けることにワクワクし、緊張感も混ざりながら毎日通勤したかったのを覚えています。

あの頃から40年以上も勤務できたのは、何よりも諸先輩先生方が温かく迎え入れてくださったからであり、感謝しかありません。また、生徒たちも明るく素直に反応してくれたお陰でスムーズに授業を進めることができました。（これは私が思っているだけかもしれませんが……。）

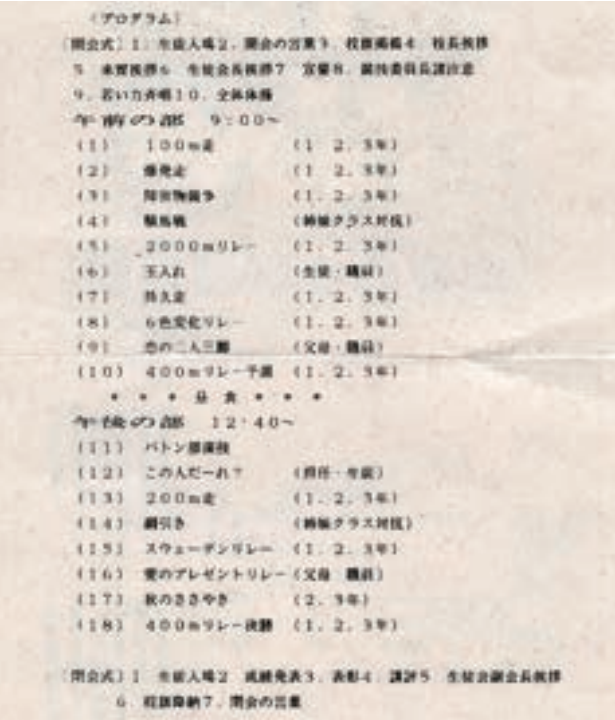
さて、私が勤務する前は中学と高校の体育行事は合同で実施していたようですが、徐々に中学のクラス数も安定し、中学部として単独で体育祭を実施するようになりました。当時の中学部の先生方の協力のお陰もあって広いグラウンド（現在第２グラウンド）に旧校舎のＫ棟屋上からロープで万国旗を張り巡らせ、また、櫓を組んで全体のスローガンを書いた看板を掲げたことは体育祭の雰囲気づくりに大きくプラスになったと思います。

体育祭は入場門からの入場行進（クラスごと）から始まり、まさに昔のオリンピック入場行進そのものでした。種目の中には、生徒たちが担任を仮装させるもの（この人だーれ？）もあり、私の仮装は「上下黒の服装で来てください」と生徒に言われ、黒のマントは暗幕を使い、靴は黒の長靴、帽子は画用紙で生徒が作成して、手にほうきを持って「魔女」に！　生徒の工夫でお金もかからず仮装できました。この企画は200Ｍトラックを生徒の言われるままに教員が仮装して一周歩くので、見る側の生徒はとても楽しんでいました。当時仮装して歩いていただいた先生方、本当にありがとうございました。

生徒による担任を仮装「魔女」（この人だーれ？）

また、もう一つの企画では「大きなボールを転がす種目」を実施したいと考えましたが、ボールを買う予算が無いので「竹でボールを造るしかない」と、当時のＡ教頭に相談すると、実家に竹林があるとのことで、教員数名でトラックに乗り、竹を取りに行きました。そのおかげで、素人ながら早々から生徒と一緒に竹を組み、“歪な丸型ボール”が出来上がりました。その上に大量の新聞紙を貼り、完成！　竹を取りに行く過程から完成まで、時間と労力はかかりましたが楽しい思い出となり、この企画を通して生徒たちに活気が出たことを覚えています。

高校生の体育祭プログラムの中で印象深いのは、６～


（プログラム）
〔開会式〕1．生徒入場 2．開会の言葉 3．校歌斉唱 4．校長挨拶
5．来賓挨拶 6．生徒会長挨拶 7．宣誓 8．競技委員長講評等
9．若い力斉唱 10．全体体操
午前の部　9：00～
（1）　100m走　（1．2．3年）
（2）　徒競走　（1．2．3年）
（3）　障害物競争　（1．2．3年）
（4）　騎馬戦　（棒倒クラス対抗）
（5）　2000mリレー　（1．2．3年）
（6）　玉入れ　（生徒・職員）
（7）　持久走　（1．2．3年）
（8）　6色変化リレー　（1．2．3年）
（9）　恋の二人三脚　（父母・職員）
（10）　400mリレー予選　（1．2．3年）
＊＊＊昼食＊＊＊
午後の部　12：40～
（11）　バトン舞演技
（12）　この人だーれ？　（教師・生徒）
（13）　200m走　（1．2．3年）
（14）　綱引き　（棒倒クラス対抗）
（15）　スウェーデンリレー　（1．2．3年）
（16）　愛のプレゼントリレー（父母　職員）
（17）　秋のささやき　（2．3年）
（18）　400mリレー決勝　（1．2．3年）
〔閉会式〕1．生徒入場 2．成績発表 3．表彰 4．講評 5．生徒会副会長挨拶
6．校旗降納 7．閉会の言葉

聖霊中学校体育祭プログラム（1990年）

７分間の曲に合わせてさまざまな隊形に変化して表現する各学年のマスゲームです。学年全員がグランドいっぱいに広がり、見栄えよく表現するために学年やクラスで色を統一させて揃いの手具（ビニールテープやフラッグ・カラー軍手等）を持って発表していました。

発表に至るまで、各学年の体育科の教員が指導にあたるのですが、各教員はまずマスゲームの入場から隊形移動、退場までの３～４曲を選曲・決定しなければ次の段階に進めないため、１学期の間は常にマスゲームのことを意識しながら音楽を聞いていたものです。曲が決定した後はグランド一面を使ってどのように生徒を移動させるか、夏休み中試行錯誤していました。実際頭の中で描いている通りにはならないことも多々あり、いざ生徒に動きを覚えさせ、動きをそろえさせるのは大変なことでした。完成までに使える時間は、約６時間分のクラスごとの授業時間と限られた学年全体の練習時間です。そこで全ての生徒の隊形移動、位置の確認、動き等の指導をし､最後に曲に合わせて全体の動きをそろえるのですが、ほぼ“ぶっつけ本番”ということもありました。しかし、時間を費やした分、本番で完成された演技を見たときには心にグッとくるものがありました。これも生徒たちが頑張ってくれたおかげであり、その生徒の頑張りに感謝しています。１学年６クラスの集団をマスゲームでどう表現させるかを考えることは大変でしたが、それを一から考え、完成させる機会を与えてもらったことは今でも印象深く心に残っています。

体育行事だけではなく、学校全体で始業前に時間を取って「耐寒訓練」を行っていたことも印象深い思い出の一つです。３学期の寒い時期に一週間、グランドのトラックを中高生徒のみならず、教員も一緒に走るという行事でした。走り終えて教室に戻る頃には身体が温まり、その後の学習も捗ったのではないでしょうか（教員は辛かったようですが……）。また、グランドのみを走るのではなく、校外に出て走る行事も企画し、学校から青少年公園（現モリコロパーク）や陶磁器資料館まで走るという大胆なことも実施しました。公道を走るので、「安全に実施する」という前提のもと警察署からも許可がおり、校外に出て普段とは違う景色を見ながらゴールまで走り切るという目標を持って生徒たちは頑張りました。コース上の要所ごとに教員が立ち、指導や応援をしたことも思い出します。しかし残念ながらこの行事は継続することができず、高校生は長距離を走る行事は無くなってしまいました。中学生は現在でも継続している「駅伝大会」に引き継がれています。駅伝大会は広い敷地をもつ聖霊だからこそできる行事であり、校内で上り坂も下り坂もある中、各クラス５チーム（１チーム７～８人）で構成し、次チームにはグループの各々が持っているたすきをバトンにしてつないでいきます。聖霊は門から校舎・第２グランドまで、長い坂（乙女坂）を上り切らないとゴールは見えてこないため、不安に思う気持ちをおさえながら自分と闘い、普段は四季折々の姿を魅せてくれる美しい乙女坂が一番苦しく厳しい坂になることでしょう。この日に向けてのクラス一体となり、挑戦する気持ち、仲間との励まし合い、そして完走することの喜びや感動を体験することができたことがきっと生徒たちの良き思い出となっていると思います。

この40年、振り返ってみると長いようで短かったようにも感じます。学校生活を含め、世の中が大きく変化する中、古いものと新しいものと共存させながら一致団結し、聖霊だからこそできることを大切にしていってほしいです。長年にわたって聖霊で勤務できたことに心より感謝し、今後は陰ながら応援させていただきます。聖霊ありがとう。

（聖霊高等学校・中学校元教諭）

南山発見

聖園女学院　制服第一装モデルチェンジ

～新しい自分に出会うチャレンジを目指して～

鹿野　直美

2024年度、中学１年生（79回生）・高校１年生（76回生）から、制服の第一装をモデルチェンジいたしました。

1946年創立以来、本校の歴史と共に刻まれた聖園生のシンボルとも言えるジャンパースカートにボレロ、丸襟ブラウスは、清楚で奥ゆかしいカトリック女子校らしさを表現するものでした。

盛夏服（南山アーカイブズ所蔵）

48年ぶりの高校募集の再開は、これまでの制服に関する課題を検討する大きなきっかけになりました。中学入試の観点からも、女子校としての制服の在り方は、幾度となく外部から問題提起を頂いておりました。ある中学入試イベントで、参加校の制服モデルが一同に展示された会場で、本校の制服に目を止めて頂けない光景は忘れられませんでした。又、日常生活の中で、生徒達の声や様子から、快適さに欠ける難点があることも感じとっておりました。時代と共に、夏期着用のポロシャツや、スラックスは順調に導入して参りましたが、生徒募集の現状からも、カトリック校としてのゆるぎない価値観教育を積み重ねた伝統ある歩みの中で、今、学校が求められているものに真摯に向き合う必要があると痛感いたしました。

長年、制服に関わってこられた聖心の布教姉妹会・シスター橋本美穂先生（第６代校長）から引き継いだ責任ある立場として、モデルチェンジという大きな課題に取り組むことになった私は、真っ先に橋本先生に相談しました。橋本先生は、「変わらないものには、それが、良いものだからという理由もあるでしょう。しかし、やれることを考えず、そのままにしている面もあるのではないですか？　今の子供達にこの制服がどう映っているか、時代にふさわしいかよく考えてごらんなさい。」というアドヴァイスを頂き踏み出すことができました。この時、「変えられるものを変える勇気を」（R. ニーバー）という祈りの一節が頭に浮かびました。

仕上がり（一般公開）は、2023年６月の第１回学校説明会という約６か月の短期スケジュールの中で、制服メーカーの担当者の方とデザイナーの方、生徒指導部・運営委員の先生方には、たくさんのサポートを頂きました。職員室の男性の先生方も自分事のように見て意見を下さり、大変心強く、仕上がりを楽しみに進めて参りました。デザイナーさんからは、本校の校風を表わす素敵なデザインを提案して頂き、学校として、素晴らしい出会いになりました。

毎日長時間着用する生徒達にとって、制服は日常着としての側面もあり、着心地の良さは最優先に、そして、制服であっても自分を表現できるデザイン性、各自の人格を包み込み、品格を醸し出すもの、洋服の力を感じられる制服にしてほしいというコンセプトをお伝えしました。

何度も意見交換や素材選びをして、「湘南の海や澄んだ空を感じさせる爽やかなブルー」をキーカラーに、全体像がまとまりました。

スカートは、生徒の成長をイメージしたブルーのグラデーションチェックで、他に見られないデザインです。

制服の着こなしガイドブック①

ジャケットは、ストレッチ素材で動きやすく、撥水加工の生地です。縁取りのグログランテープとオリジナル水七宝のボタンは、フォーマル感があり、優しいフォルムに、凛とした気品が感じられます。袖口には、筆記時に机に当たる音に配慮して、ボタンを付けずパイピング仕上げにしました。

白ブラウスは、透け防止、UV カット等女子に配慮した素材にこだわりました。

リボンは、中学・高校の区別として、中学生は、明るく快活な印象のブルーグレー、高校生は、聡明さを感じさせるネイビーブルーです。

オプションアイテムとして、３色（白・紺・グレー）のニットベスト、生徒デザインのネクタイにより、着こなしのバリエーションが増えました。

ミドルソックス・ネクタイ・ブラウス・ベストには、生徒達のお気に入りスクールイニシャル、MJ がワンポイントに入っています。

新モデル制服デザイン

第一装指定日以外は、その日の気温や体調、気分にも合わせてコーディネートできる利点があります。

毎朝、袖を通す時に、「登校が楽しみになるような、新しい出会いにわくわくするような気持ちになる制服を」という思いを込めて関わらせて頂きました。

現在は、中・高２、３年生が旧モデルを着用しており、新・旧両方の制服着用の生徒達が生活しておりますが、どちらも良い形で校風を創っていると感じております。

制服の着こなしガイドブック②

昨年の新モデル校内公開後、当時の生徒会長（高校２年生）の生徒が、「皆の代表で相談にきました。自分達も新しい制服を着られるようにして欲しいです。」と真剣に話してくれました。内心､大変嬉しく思いましたが、様々な観点から、その申し出を100パーセント叶えることは、難しいことを丁寧に説明し、しかし、夏期使用のオプションアイテムの種類は可能ということを提案いたしました。猛暑に少しでも快適な選択肢があればと思います。

今年度、ニューモデルの制服の着心地は、生徒達に好評で、何よりも「着心地が良い。」という声が多くあり、嬉しく思います。アイテムが増えたこともあり、ネクタイ・リボン、３色のベストも思い思いに着用し、同じ制服でもより個性が発揮される着こなしになったように感じます。

本校のスクールミッションは、学力と共に、人間性や感性を重視する女子教育です。今後、制服が、それぞれの感性を磨く一助になり、自分らしさに自信と誇りを持ち、新しい自分に出会うチャレンジを目指してほしいと願っております。

（聖園女学院中学校・高等学校教頭）

『かけがえのないあなたと私』を感じる南山小の宿泊学習

水越　建太

コロナ禍による学校行事の見直しが図られる中、南山小の教育の柱にもなっている『宿泊学習』も例外ではありませんでした。当時在籍した子どもたちには我慢を強いることになり、悲しい思いをさせてしまいました。2022年度にようやく試行的な宿泊学習が復活し、今年度は３年生から６年生が、本校の教育モットー『かけがえのないあなたと私のために』を体感・体現するために各地で活動をしています。

本校では2008年度に開校した当初から、宿泊学習を大切な行事の一つとして取り組んできましたが、その後17年間の中で、その実施形態や行き先、体験内容等は変化してきました。そんな現在だからこそ、本校で宿泊学習という特色ある行事が立ち上がったはじまりや、その後の経過について、残されている史料をひも解いてみたいと思います。

本格的なはじまりは、本校が設置される前年度、『南山小学校設立準備委員会』の時代にさかのぼります。「第22回　カリキュラム編成等および児童の安全に関するワーキンググループ（通称カリキュラムワーキング）」（2007.6.27）の議事録に初めて「宿泊学習」の文字が登場しています。

⑧　学校行事

水越委員より学校行事について説明があり、継続審議とした。

「学校行事については、遠足、運動会ありきではなく、子どもに力をつけさせるにはどういう行事がよいのかという観点で考えている。子どもの実態や教育理念から、１年生から宿泊行事を行うことによる教育的価値は高いと考え、６年間を通しての宿泊行事を検討している。意義としては、子どもの実態、教育理念に照らし、少子化や核家族化による人間関係の希薄化、生活体験の不足、学校生活だけではできない体験学習が必要であるとの認識である。また、宗教教育、社会奉仕、豊かな人間性の育成、国際性の涵養、家庭との教育連携が関係してくる。豊かな人間性の育成は、宿泊行事で育むことができると思う。６年間を通してステップアップを考える。たとえば、１年生では親からの自立。２年生は友達をより知ること、家庭生活との切り離し、自然に触れることなど。３年生は礼節やマナーを学び自然に浸るなど。４年生は集団内で自らの役割を自覚すること、自然の中で働くことなど。５年生は分かち合いや思いやり、自然の中で自活すること。６年生は意思伝達、他者理解などを目標とする。」

「１年生でも、２泊３日の合宿は自立のためによい経験だという意見が大学教員からあった。」

（第22回　カリキュラム編成等および児童の安全に関するワーキンググループ）（2007.6.27）

元々は前年度から話はあったようですが、この提案から本格的に宿泊学習についての検討が進められていきました。第23回のカリキュラムワーキングでは、「合宿関係は、まだ直接交渉はしていないが、多治見の修道院や瀬戸キャンパス研修センターを借りることを考えている。」といった文言があり、この頃から１～３年生の宿泊学習の大枠が形作られたことがうかがえます。

2008年度に開校してから６年目、開校時１年生だった子どもたちが最高学年を迎え、宿泊学習も「完成年度」となりました。当時の宿泊学習について、保護者会わかみどり発行の『わかみどり第17号』（2013.12.1）に４ページにわたる特集が組まれ、６年間の宿泊学習の詳細な説明がなされています。その中の、「宿泊学習６年間のストーリー“巡礼の道”」というコーナーでは、６年間を通した宿泊学習のねらい・価値・願いを「道」になぞらえて分かりやすくまとめてくださっていました。

「宿泊学習６年間のストーリー“巡礼の道”」

宿泊学習５つのねらい

①南山大学附属小学校の校訓に近づくため、校外で自然、社会、文化、人にふれあいながら、自分と周りとのかけがえのなさに気づく。

②多様な宗教の経験を通じて、キリスト教の学習を発展させ、異なる宗教や考え方を深く理解し尊重する

『わかみどり第17号』(2013.12.1)

心をもつ。

③何か１つ社会に対し奉仕できることを考える時間をもつ。(熊野古道を修繕する、実際にお世話になったお寺の本堂や小学校のそうじをするなど)

④思いをもった人や、自然の環境にふれあい、様々な気付きをさせていただくなかで、その学年にふさわしい、学校内ではできない学びを成立させる。

⑤南山大学附属小学校の子どもたちと先生にしかできない事に取り組み、かけがえのない時間を持つ。クラスや学年の友だち、先生方と寝食を共にする体験の中で南山大学附属小学校ファミリーの絆を深める。

「宿泊学習のストーリー“巡礼の道”」

１年生　南山大学名古屋キャンパス・小学校

「学校生活を送る原点～家から学校へ行く道～」

２年生　海上の森・南山大学瀬戸キャンパス

「“もの”の奥にある“ひと”の“こころ”～自然の道～」

３年生　多治見修道院

「修行の道、宣教者の道」

４年生　熊野古道

「人々が祈りながら歩いた道」

５年生　高野山・京都

「26聖人の歩いた道」

６年生　軽井沢から多治見修道院へ

「神言会ゆかりの軽井沢修道院・巡礼の道の終着点へ～６年間の学びの道～」

この宿泊学習を通して、自分の使命を自覚し、真のリーダーとして「人間の尊厳」を尊重する“自分の道”を見つけて歩む礎にしてほしいです。

『わかみどり第17号』(2013.12.1)

本校の宿泊学習の行き先は、地味に映るかもしれません。しかし、レクリエーションでも物見遊山でもない、まさに「かけがえのないあなたと私」に気づくための唯一無二の宿泊学習であると誇りに思っています。開校から17年の中で、行き先や泊数の減少、１・２年生の宿泊学習の廃止などの大きな変化もありましたが、根底に流れる宿泊学習の精神はなんら変わっていません。さらに数年前から、これからの宿泊学習について検討する委員会を立ち上げました。子どもたちのわくわくとした姿や、精一杯活動をする姿を思い描きながら、より意義深いものになっていくことでしょう。

(南山大学附属小学校教諭)

南山学園小島鐐次郎記念室紹介

南山学園小島鐐次郎記念室を開設しました

寺本　将史

南山学園小島鐐次郎記念室（以下、「記念室」という。）は、故小島鐐次郎氏（以下、「鐐次郎氏」という。）のこれまでの南山学園に対する多大な支援・貢献を形として残し継承すること、南山学園で学ぶみなさんや関係者が「南山学園での教育や学びに誇りを持って人生を歩んでほしい」という思いで、2024年3月に、南山学園講堂内に開設しました。

鐐次郎氏は、南山中学校（旧制中学）の卒業生で、中学生の時に、恩師ヨゼフ・ライネルス神父に出会い、人間は一人ひとりがかけがえのない存在であるということを学び、その後の人間形成に多大な影響を受けました。そして、人との出会いやつながりを大切にしながら自動車事業に一から挑戦し、小島プレス工業を創業した鐐次郎氏の父・濱吉氏の想いを引き継ぎ、人づくりを柱に、得意先をはじめ、地域や社会に貢献できる企業として発展させた人物です。

記念室は、鐐次郎氏の生涯を、南山中学校でのライネルス神父との出会い、そこから受けた影響、南山学園との関わりや思い、南山学園への支援・貢献、並行して小島プレス工業における活躍や自動車を始めとする名古屋地域の産業発展への貢献、事業を離れた様々な活動など、ヨゼフ・ライネルス神父と鐐次郎氏の出会いからはじまる南山学園との長きにわたる交流で生まれた絆や相互の感謝を年代順に紹介しています。

記念室の入口には、市瀬理事長による鐐次郎氏への感謝を記した記念室設立の思いを掲示しています。記念室に入ると、「鐐次郎の生涯」「ライネルスと鐐次郎」「永遠の学び舎」「鐐次郎の実践と栄誉」の4つのコーナーがあります。「鐐次郎の生涯」コーナーでは、鐐次郎氏の人物像、鐐次郎氏と南山学園のあゆみを年表にして、紹介しています。続く、「ライネルスと鐐次郎」コーナーでは、ライネルス神父の人物像、南山学園の教育、ライネルス神父と鐐次郎氏との出会いなどを説明しています。鐐次郎氏の最初の授業が、ライネルス神父の授業であり、一人ひとりを大切にするその教育に対しての姿勢に感銘を受けたことも紹介しています。ここから鐐次郎氏と南山学園との深い絆がはじまったのではないかと感じています。そして、入口正面の「永遠の学び舎」コーナーでは、南山国際高等・中学校の小島講堂に実際に掲げられていた「南山学園で学んだことを生涯の誇りとします」とする銘板を設置しています。最後の「鐐次郎の実践と栄誉」コーナーでは、小島プレス工業の人づくり、地域貢献、ローマ教皇からの受章、南山大学名誉博士号授与などを紹介しています。さらに、展示ケースには、ローマ教皇功労章同封物や南山大学名誉博士号学位記（レプリカ）などを、展示しています。

記念室は、平日（月曜日～金曜日）10：00～16：00に利用できます。料金は無料です。事前予約制ですので、見学を希望される方は、南山学園アーカイブズのWebページをご覧いただき、お問い合わせください。お待ちしております。

（経営本部　総務・人事部　総務課長）

第７回 南山アーカイブズ企画展

南山アーカイブズ 10年の歩み

▶ 2024.10.1（火）～2025.7.31（木）

▶ 学校法人南山学園　南山アーカイブズ企画展示室
（名古屋市営地下鉄鶴舞線いりなか駅より徒歩５分、開館：平日 10 時～16 時）

▶ 予約不要・入場無料

学校法人南山学園
南山アーカイブズ

〒466-0838　名古屋市昭和区五軒家町６番地
TEL：052-861-0613　URL：https://www.nanzan.ac.jp/archives/

南山アーカイブズニュース　第17号
Nanzan Archives News

発　行　日　　2024年11月１日
編集・発行　　南山アーカイブズ
　　名古屋市昭和区五軒家町６番地
印　　刷　　株式会社あるむ
　　名古屋市中区千代田3-1-12

WEB版はこちらからご覧いただけます